

感情コミュニケーションの社会学と現代社会(1)

内 田 司

要 旨

現代社会における私たちの生活様式の諸特質の一つは、理性と感情が対立させられ、理性だけが重視され、感情（生活）の重要性が等閑視されてきたということである。というのも、私たちが生活している現代の市場経済社会では、私たちは、最小費用による最大の利潤追求、そのことを可能にする最適化と効率化、そして計算可能性という、近代合理性の経済化された生活原理が至上原理となった社会生活に、否応なしに適応しなければならなかったからである。こうした市場経済社会における経済様式化された社会生活の中では、私たちは否応なく自分以外の外的世界と、自己の私的（経済的）利益を実現するために、損得感情（勘定）にもとづいて、手段的・道具的にかかわらざるをえない。その中では、理性＝知性とされ、私的目的実現の手段として重視されるが、感情はそうした合理的な活動を攪乱する非合理的なやっかいものとして従属的な地位に押し込められてきた。しかし、こうした感情生活を抑圧する社会生活は、諸個人の精神生活だけでなく、対人関係、対社会的関係行為にもさまざまな問題を引き起こしている。連載からなる本稿は、かかる現代社会における諸個人の感情生活の非合理的な存在様式によって引き起こされている、諸個人の精神生活、人間関係、社会との関係にかかわる諸問題を、感情コミュニケーションの視点から分析することを目的としている。その最初となる本稿では、社会学の中に感情生活がどのように位置づくのかを検討することが課題となる。

キーワード：感情コミュニケーション、共感、損得感情（勘定）、疑心暗鬼のコミュニケーション、傲慢とルサンチマン、愛

目 次

- 序 問題の所在
- 第一章 社会・生産と生活の社会的諸組織・人間関係・諸個人の精神生活と行動・行為
- 第二章 理性と感情に関する理論（本号）
- 第三章 感情コミュニケーションの理論
- 第四章 現代社会における生活原理・社会関係原理と感情コミュニケーションの諸類型
- 第五章 現代社会の社会変動と社会関係の変容、諸個人の精神生活の諸問題
 - 第1節 現代社会における社会変動と社会類型
 - 第2節 現代社会における生活諸領域の分節化と生活諸領域間の関係様式
 - 第3節 現代社会における消費の場における生活・社会関係・個人の精神生活
 - 第4節 現代社会における労働の場における生活・社会関係・個人の精神生活
 - 第5節 現代社会における教育の場における生活・社会関係・個人の精神生活
 - 第6節 現代社会における家庭という場における生活・社会関係・個人の精神生活

的

結語 「共感」に基礎をおいた感情コミュニケーションが豊かに発展する社会のあり方を
求めて

序 問題の所在

かつて、理性と感情に関する理論を展開したイギリスの哲学者マクマレー氏⁽¹⁾は、近代以降の時代を、私たちが社会生活の中で否応なく感情問題に直面せざるをえない時代というように特徴づけた。彼自身のことばで言えば、理性と感情が対立させられている近代以降の社会において、「私たちすべてのものは、今、もし真剣に生きているならば、感情の平穏が乱されているであろう。どのように解決したらよいのかわからないもろもろの感情問題に直面しているのである。そのお陰で、心は乱れ、不安でいっぱいになり、ときどきは、一生を台無しにしてしまうのではないかという恐れに脅かされている⁽²⁾」というのである。彼のその考察は、私たちが生きている現代日本社会における社会生活の現状を見事に言い当てている。若者の間における社会的ひきこもり、フリーター・ニート問題、自殺の増大、理由なき無差別殺人の出現、職場におけるうつ病、過労死、過労自殺の増大、学校における不登校、いじめの増大、そして家庭におけるドメスティックバイオレンス、児童虐待など、その例示には事欠かない。

これらの社会的諸出来事は、現代社会における私たちの心の風景を映し出しているものであろう。そして、そうした出来事として映し出されている現代社会における私たちの心の風景とは、自他への攻撃に転化しかねないいきり、いらだち、不安・恐れ、孤独、疲れ、うつろ・空虚というものであろう。では、かかる個人内在的な心理的な現象という特徴をもっている出来事を、はたして社会学は説明しうるものなのであろうか。また、説明しうるとするならば、その研究方法はどのようなものとなるのであろうか。

一般的に言えば、社会学は社会と個人との関係の諸規則性を探究する学問であらう。そうした視点を有している社会学の目で見るとすれば、そうした研究対象において説明すべき間は、先述のような心の風景とそこから出てくる私たち個々人のこれも前述したような社会的行動・行為は、現代社会のどのような社会的諸条件、または社会変動と関係しているのであろうか、というものとなろう。連載から成る本研究はかかる間に、感情コミュニケーションの社会学の見地から答えてみようとするものである。そこで、次に、よりその課題をしぼり、焦点をハッキリさせるためにも、他分野での先行研究における論点を抽出しておこう。ただ、断っておかなければならないことは、他分野のすべての先行研究を検討することは著者の能力からいってとてもできないので、感情コミュニケーションの社会学によるものとは対照的な議論を行っているものに限定したいということである。

かかる問題に関して社会的に多くの発言を発信してきたのは、精神科医や臨床心理学に関係する人たちではなかろうか。そうした発言の中に、現代人の社会的行動・行為⁽³⁾様式の特徴を、

自己中心的で、モラル心に欠け、無気力で、非社会的な行動・行為様式であるというところに見、その主要な原因を、戦後日本における経済生活が豊かになったこと、子供を甘やかして育てるようになった親の育児法にあるとの見解が多く見られるように思われる。そうした見解は、とくに現代若者の社会的行動・行為のあり方を論じるときに、それらをバッシングするという色調を帯びて表明されているように思える。しかも、そうした見解は、現代の日本社会でかなり大きな影響力をもっているものなのではないだろうか。

これらの見解の代表的なもの1, 2の例を簡単に見てみよう。まず、河合隼雄氏の次のような見解を取り上げてみよう。河合氏は、現代日本の若者の社会生活の中で、「空虚さとかアパシー（無関心）の問題は、いま大変に深刻です⁽⁴⁾」〔（ ）内は原文による。以後、断りの無い限り、（ ），下線や傍点による強調は原文によるものである〕と言う。では、そうした若者の精神状況はどのようにして生じてくるものなのであろうか。河合氏によれば、「いまの日本は豊かになり、モノもあふれ返っていますし、その上、子どもの数が少なくなったから、親たちの間に、子どもに対する愛情のはき違えが蔓延^{まんえん}しています⁽⁵⁾」。「空虚さも無気力も、そうした社会的背景のもとで起こっているように思われます⁽⁶⁾」ということになる。さらに氏自身のことばで敷衍するならば、「人間が生きていく場合、ある程度、モノがないほうが生きやすいのではないかと私は思っています。あまり豊かすぎると、自分の目標が見えなくなってくるからです⁽⁷⁾」。しかも、「とくに日本人は家庭教育に失敗して⁽⁸⁾」（下線強調は引用者による）おり、「子どもになんでも買い与えるようなこと⁽⁹⁾」をしているので、「その結果としての空虚さ、無気力さを抱えた若者が来る⁽¹⁰⁾」のはよく理解できることなのである。

同じ問題を、「深層心理学」を専攻しているという林道義氏は、父性の欠如という観点から解こうとする。林氏いわく、現代社会の子どもや若者の「無気力現象ははっきりと父性の欠如からきている場合が多い⁽¹¹⁾」のであると。さらに氏のことばに耳を傾けてみよう。氏はいう、「父が父でなくなっている。父が父の役割を果たしていない。家族を統合し、理念を掲げ、文化を伝え、社会のルールを教えるという父の役割が消えかけている。その結果、家族はバラバラになっていわゆる『ホテル家族』となり、善悪の感覚のない人間が成長し、全体的視点のない利己的な人間や無気力な人間が増えている⁽¹²⁾」のであると。そうした「父でなくなった父の典型が『友だちのような父親』である。彼らは上下の関係を意識的に捨ててしまった。価値観を押しつけることは絶対にしない。子どもの自主性を重んじて決して強制はしない。何をするのも自由放任である。しかしそういう父親の子どもは『自由な意志』を持つようにはなるが、『よい意志』を持つようにはならない。精神力がなく無気力になりがちなので簡単に不登校になったり、逆にわがままになると『いじめ』に走ったりする⁽¹³⁾」。まさしく、林氏によれば、「いじめは善悪の区別の感覚を失っていることを示しているし、不登校、無気力（スチューデント・アパシー）、遅刻といった現象も精神力の低下を示しており、それは父性の欠如と関係がある⁽¹⁴⁾」のだ。

これらの見解の特徴は、現代社会における人々の感情問題のその原因の探求において、それを子どもや若者に限ってみても、親の子育ての失敗ないしは間違いという親子関係のあり方、とくに子育てのあり方を重視しているということである。また、現代社会に特有の社会的条件については、これらの見解では、経済生活における豊かさの実現、男女の平等化、子どもの人権の確立化などを否定的に見ている。だが果たして、これらの見解は、現代社会における感情問題を解明しようとするとき、導きの糸となる見解といえることができるであろうか。

結論から言えば、その答えは、ノーである。重要な論点の一つは、これらの見解は、その後仮説として、親は自分たちの子どもたちを、彼らの感情、性格、そして社会的行動・行為を自由にコントロールできる、ないしはすべきだという考えをもっているということであろう。しかし、社会学や心理学における社会化研究の蓄積によれば、子どもが生まれて社会の一員として育っていく過程で、子供たちの性格や（例えば非行などの）社会的行動・行為様式などの形成に対して、彼らの親の育て方が与える影響は小さい、またはほとんどないということが言われてきているのである。例えば、進化心理学のスティブン・ピンカー氏の言う「行動遺伝学の三法則」によれば、「第一法則 人間の行動特性はすべて遺伝的である。第二法則 同じ家庭で育った影響は、遺伝子の影響よりも小さい。第三法則 複雑な人間の行動特性に見られるばらつきのかなりの部分は、遺伝子や家庭の影響では説明されない⁽¹⁵⁾」（下線強調は引用者による）のである。

さらに、スティブン氏のことばを引用するならば、とくに「高い教育を受けた親のほとんどが、子どもの運命は自分の掌中にあると信じている。彼らは自分の子どもに、世間の評判がよく自分に自信をもち、いい成績をとって学校をきちんと卒業し、ドラッグやアルコールやタバコは避け、十代で妊娠したり父親になったりせず、法律を守り、しあわせな結婚をして職業的にも成功することを望む。その親たちに、おおぜいの育児の専門家が、そういう結果を得るための方法を次つぎと、内容はたえず変わりつづけるが、けっして変わらない確信をもって助言してきた⁽¹⁶⁾」のである。しかし、同じくスティブン氏によれば、子どもの社会化にとってより重要な要因は彼らの仲間集団なのであり、それゆえ、「子どもは単に仲間の規準に引きつけられるだけでなく、ある程度、親の期待の影響を受けないようにできている。親子間対立の理論からでてくる予測によれば、親はかならずしも子どもを本人にもっとも有益になるように社会化するわけではない。したがって子どもは、親があたえる褒美^{ほうび}や罰や模範や小言を当面は（まだ年少で、ほかに選択の余地がないので）おとなしく受け入れるとしても、この理論にしたがえば、そのような戦術で自分のパーソナリティーが形成されるのを許すはずはない⁽¹⁷⁾」ものなのであった。

第二の論点は、例えば子どもや若者の無気力やアパシーなど現代社会における諸個人の感情（精神生活上の）問題に関わる社会的諸条件の問題である。それらの問題に対して、河合氏があげる豊かになった経済生活や、林氏のあげる父子関係の友達親子化、男女の平等化、子ども

の人権の確立化などは、結論だけを先に述べておくならば、かなりのはずれであると言わなければならないように思われる。では、感情コミュニケーションの社会学は、それらの問題にどのように接近するのであろうか。

第一章 社会・生産と生活の社会的諸組織・人間関係・諸個人の精神生活と行動・行為

社会学という学問は、一般的に言えば、社会と個人の(相互作用)関係における諸規則性を探究する学問である。一般的に言えば、社会と個人とは、つくりつくれる相互作用関係にある。しかし、私たちが生きている現代社会は、マクロ的に見れば、地球全体で一つの、人々の物質的生活の生産と再生産を担う、大きな生産有機体を形成するまでにその広がりをもっている。それゆえ、一口に社会といっても、地域社会学的視点に限ってみても、地球社会、EUなどの諸国家連合社会、各国の国家社会、国家内における州・支庁、県、市町村などの国家の下位の政治・行政範囲社会、そしてそれら基礎的政治・行政範囲社会の下部機構である行政区やコミュニティ社会というように、現実には、その性格も諸個人にとって持つ意味も大きくことなる諸社会という形で存在しているのである。

しかも、社会は、どのレベルの社会をとっても、その構成員である諸個人との関係においては、諸個人の主観の単なる集合以上の存在である、諸個人の行動・行為の単なる集合以上の存在であるという性質を有している。というのも社会は、それを構成している人々の責任のあざかり知らぬ歴史的進化過程の中で形成され、諸個人は、すでに存在し、諸個人から自立・自存し、諸個人の意識や行動・行為の存在様式に影響を与える諸価値や諸秩序の客観的体系の中に産み落とされ、成長過程の中で、そうした社会に適応していかなければならないという社会との関係におかれているからである。すなわち、社会は永遠であるが、具体的個人は有限的存在である。しかし、その歴史的な時間の視点から見れば、有限な諸個人の自律的な諸活動、諸行動・行為によって、社会は絶えず再生産されていかなければならないという、社会と個人との関係のもう一つの側面が存在するのでもある。こうした社会と諸個人との関係における相互のつくりつくれる関係を、パーソンズ氏は次のように表現していた。氏いわく、「社会というものは発達し進化しつつある存在なのだ……。社会は進歩的な『改良』の方向に発達していくものである。だがこの発達は、社会の構成単位—最終的に分析すれば、個々の人間—の自律的なイニシアティブと業績を通してはじめて可能になるのである。したがって、社会の個々の成員に重い責任を(期待という形で)負わせるのは、まさしく社会なのである⁽¹⁸⁾」。

さらに、社会と諸個人との関係において、社会は単なる諸個人の主観の集合体、諸個人の行動・行為の集合体には還元できない、それ以上の存在であるという性質が際立つ、現代社会に特有の性格が存在する。それは、パーソンズ氏の言うアノミーという性格である。パーソンズ氏によれば、個々人による自己の利潤・利益追求の自由を不変の最高価値として承認し、他者

との競争関係の中で自己の利潤・利益の極大化ゲームが展開されているアメリカを典型とする市場経済社会（パーソンズ氏はこうしたアメリカを典型とする市場経済社会の価値パターンを道具的活動主義と命名している）とは、単一の普遍的な社会目標、すなわちマクロレベルの社会統合を図る価値が欠如した社会なのである。言い換えれば、かかる市場経済社会においては、諸個人の行動・行為を主導する価値は確固として存在しているが、それらの諸個人の行動・行為を社会的に統合することを可能にする価値は存在していないということなのである。それゆえ、パーソンズ氏によれば、個々人の自律的なイニシアティブと業績を通して再生産されている社会の発達と進歩は、それぞれ思惑の異なる諸個人の、自己利潤・利益の極大化ゲーム参加の中で展開される行動・行為の、ときには個々人の主観的意図を挫くように作用する「ベクトルの結果としての合力⁽¹⁹⁾」という性格を有しているのである。かかる現代社会の性格は、一方で、諸個人に重大な責任を課しながら、他方では、諸個人の社会への適応を大変困難にしているとパーソンズ氏は見るのである。

パーソンズ氏は言う、道具的活動主義という「アメリカの価値パターンとそこで進行しつつある変動過程、その双方の性質を勘案すれば、個々人のパーソナルな順応はかなり難しいものとなっている」と言明してもよいだろう。一方ではかかるタイプの活動主義は、それが個人主義を強調することともからんで、個人に自律的な業績達成に対する重い責任を負わせている。またもう一方ではこの活動主義は、個人を重大な制限に従わせてもいる。すなわち個人は、集合体の文脈に従って、規範と協同作業の要請とによって規制されるのはもちろんのこと、さらにまた、自らの責任と自分が従わなければならない規則を、自分自身で解釈しなければならないのである。しかもまたアメリカ社会は、その有する価値の性質からして、劇的に象徴化することのできるような、単一の明瞭な社会的目標をもつことのできない社会である。個人が考える社会的貢献というものは、それぞれ比較的特殊化されたものにすぎず、しかもかような貢献が、よりいっそう大きな全体とどのようにかかわっているかを理解するのは、必ずしも容易なことではない。さらにまた、これは科学の時代と不可分に結びついていることなのだが、伝統的な文化とシンボルが風化することによって、かつてはこの社会の価値と業績達成に意味と正当性を与えていた多くの古い定式が、適切なものではなくなってしまっているのである⁽²⁰⁾。

さらにパーソンズ氏のことばに耳を傾けてみよう。氏いわく、「広く流布している諸々の見解とは反対に、（道具的活動主義という）アメリカの基本的な価値パターンはこれまで変化することがなかった……。しかしながら価値パターンは、社会の規範的文化の単なる一部分にしかすぎない。それよりももっと低いレベル、すなわちよりいっそう限定的な価値のレベル、および同様に限定的な、われわれが専門的に規範（norm）と呼ぶもののレベルにおいては、規範的システムの絶えざる再組織化が行われているのであって、これはわれわれがこれまで論じてきた変動過程の性質からすれば当然のことなのである。ところがあいにくとかかる再組織化は、大きな革新に即応して行われることはなくそれは緩慢でむらのある、しばしば苦汁に満ち

た過程である。この過程が進行していくいかなる時点をとってみても……、期待構造の中には必ず不確定性 (indeterminacy) という重要な要素が含まれている—これはただ単に、自律的な意志決定が期待されるという自由の領域が存在することを意味するだけではなく、さらにまた、人びとが指針が必要であると感じているのにそれが全く欠如していたり、あるいは逆に、同時に満たすことのできないいくつもの相対立する期待に個人が屈したりするということも意味している。これは、デュルケムにならって何人かの社会学者が「アノミー」と呼ぶ状態である。このアノミーという緊張と混乱の源泉が、何ゆえに他の世代ではなく若者の世代によりいっそう重くのしかかってくるのか、それには一つの重要な理由があるように思われる。それは次のような事実による。すなわち変動過程を推進する主要な諸機関は、社会の他の諸部門、なかんずく大規模組織、科学技術の発達、高度の政治過程、高度の文化領域等にこそ存在しているという事実である。これらの与えるインパクトは拡大していく傾向があるが、最初に変動のあった位置から社会構造の他の部分へと変動が伝わっていくには、時間的なずれが生ずるのである⁽²¹⁾」〔道具的活動主義という〕は引用者による〕。同じくパーソンズ氏によれば、「青年ともっとも直接的にかかわっている諸社会構造 (家族と学校) は……、変動の諸結果を伝達するという点では、むしろかなり後向きの姿勢をとる傾向がある⁽²²⁾」〔 () は引用者による〕、すなわちそれらの社会では「世のおとなたちは概して、……保守的な態度を⁽²³⁾」とる傾向があるのであり、その結果として、「社会変動によって生ずる一般的な圧力と比較して、若者の世代には特殊な圧力がかかっていると考える⁽²⁴⁾」間違いないのであった。

以上、パーソンズ氏のことばに沿って現代社会に特有の社会と個人との関係の有り様を見てきたが、そうした現代社会における社会と個人との関係様式の特徴は、現代社会の中で現象する諸個人の行動・行為分析に対してはどのような方法上の注意点を与えるものなのであろうか。パーソンズ氏は、アメリカ社会における離婚の増大という現象を例に挙げながらその問題について次のように言及している。パーソンズ氏いわく、「日常的な常識というものは、やっかいな問題をはらむ諸現象をしばしば誤って解釈してしまうことがあるものだが、ここで一つそのような例を挙げて以下の分析の基調を整えることにしよう。アメリカ社会はいうまでもなくよく知られている通り、離婚率が高い。さらにまたその率は、第二次世界大戦後をピークとしてその後はいくぶん低下してきているとはいえるものの、今世紀全体を通して見れば不断の上昇をつづけてきたのである。この離婚率はこれまで広く、『家族の崩壊』を示す指標として、さらにまたいっそう重要なことには結婚した人びとの道徳的な責任のレベルを示す指標として解釈されてきた⁽²⁵⁾」。「しかしながらここで注意しなければならないのは、以上のような見解が、現代の状況における婚姻関係にはますます大きな緊張が課せられていくということを、まるで考慮に入れてはいないという点である。実際この見解に従えば、過去と現在の課題の難易度の相違をいっさい勘案せずに、ただ単に課題に失敗した人びとの割合が増大したということのみを指標にして、責任のレベル低下を云々することになる。こうしてみるとかかる解釈は一

見して道理に合わぬものであることが判るが、現象の背後にある基本的な状況が分析されていないと、それがもっともらしく聞こえてくる⁽²⁶⁾」ものなのである。

では、パーソンズ氏は、自分が社会学的分析の基調を整えるための例として挙げた離婚という現象の背後にある基本的状況の分析を、氏自身はどのようにしていたのであろうか。煩を厭わずパーソンズ氏の分析をそのまま引用しておこう。パーソンズ氏によれば、結婚に関する「課題がますます難しいものになっていくのは、そこに次のような二つの主要な局面が介在するからである。その一つは、核家族はかつては他の構造の中に組み込まれたものとしてあったわけだが、それがかかる構造からますます分化してきているということ、とりわけ経済的な支えをそこに求めていた農場、あるいは他の世帯内ないしは家族内企業から、核家族がいよいよもって分化してきているということである。かかる分化は家族とその内部の婚姻関係から、それを支える一定の構造的な基盤を奪い去ってしまうことになる。これは先に述べた自由の成分と明らかに関連している。つまり、こうして結婚の相手を自由に選択できるようになったということは、当事者同志が実際本当にうまくやっていけないのならば、婚姻関係の破棄もまたやむをえないという考え方が広範に行き渡るようになったことと、明らかに関連しているのである⁽²⁷⁾」。

「課題を難しくするもう一つの要因は、成人にしる児童にしる、家族外部の役割行動(functioning)に対して以前よりもいっそう高いレベルの期待をかけられるようになったということである。成人、とくに成人男子の場合には、その中心的な責務は、職務の要請する責任と力能のレベルにかかわっている。また児童の場合には、彼らは以前よりもいっそう複雑な競争的世界で成長し、より高度の教育を受け、そして何事かなす場合には実質的にいっそう自律的な責任をとらなければならないのであって、こうしたことは、以前と較べてさらに大きな要求を児童につけてきているわけである。私の印象では、無責任に結婚してしまうようなケースは他のどんな時代と較べても多くはないし、またさほど容易にしばしば離婚という手段がとられるわけでもない。むしろそれは、当事者同志がうまくやっっていこうと常日頃、懸命に努力したにもかかわらず、ついにそれに失敗してしまったということの告白であるように思われるのである⁽²⁸⁾」。

以上ここまで、パーソンズ氏の現代社会における社会と個人、社会変動と諸個人の行動・行為レベルにおける社会現象との関係の特徴およびそうした特徴をもった関係分析方法の基調に関する議論を、煩を厭わず詳しく見てきた。そのパーソンズ氏の議論に学びながら、次に、現代社会の中で社会問題化している、「自殺」、「殺人」、「虐待」など対人関係における攻撃的「暴力」、そして「不登校」や「社会的ひきこもり」等のような諸個人の行動・行為レベルにおける社会現象分析のための枠組みを確認する作業を行うことにしよう。

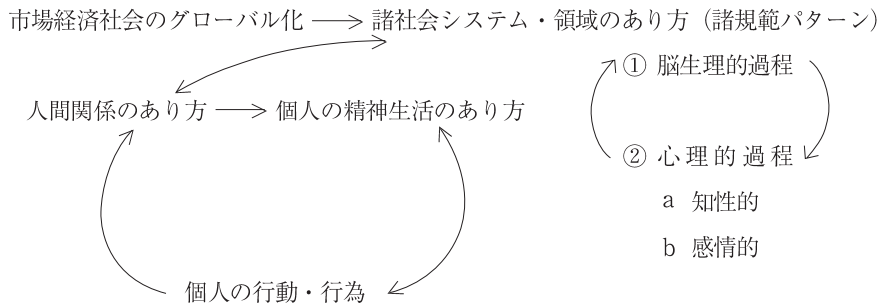
ここまでのパーソンズ氏の現代社会における社会と個人との関係に関する議論に学ぶならば、現代社会における諸個人の行動・行為レベル上の社会諸現象分析の枠組みにとってまず重視されなければならないのは、諸個人の行動・行為を基本的に枠づけている現代社会の価値パターンであろう。パーソンズ氏自身は、その価値パターンを道具的活動主義と名づけていた。

それは、著者流に呼べば、市場経済社会の価値パターンであり、利潤・利益追求の自由、競争主義、業績主義、目的—手段的行動・行為主義、効率性とスピード重視、そして計算可能性重視等という下位の価値諸規範に分化されうるものであろう。

その価値パターンは、パーソンズ氏も指摘しているように、近代以降現代に至るまで、基本的に不変のまま私たちの社会的行動・行為を規定しつづけてきた価値パターンである。だからといって、市場経済社会としての近現代社会は、パーソンズ氏も注意を促していたように、社会変動が全くない静的な社会なのではない。むしろ反対で、どの歴史上の諸社会よりも急速且つ不断に変化しつづけている社会なのである。その社会変動の内実とは、第一には、ただ単に空間的広がりが不断に拡大していくだけでなく、同じく不断にその内部構造を、それぞれ固有の諸規範パターンをもつ諸社会システム・領域へと専門的機能分化させ、それらの諸社会システム・領域間の有機的絡み合いを深化させることによって、複雑化させていっているというものである。市場経済社会の社会変動とは、そのように社会の構成単位の専門的機能分化とそれらの関連構造の複雑化のことであり、同時に、第二には、諸社会システム・領域内における「規範的システムの絶えざる再組織化⁽²⁹⁾」過程という内実をも有している。

かかる市場経済社会における社会変動は、一応二つの局面に分けて考察することができよう。その一つは、グローバル化している市場経済社会の内部で専門的機能分化しているそれぞれ固有の諸規範パターンをもつ諸社会システム・領域間の有機的絡み合いの諸形態の歴史的展開過程という局面である。この局面における市場経済社会の社会変動とは、マルクス主義的に言えば、資本のマクロレベルにおける蓄積構造の転換ということであろうし、レギュレーション学派流に言えば、フォーディズムからポストフォーディズムへの転換といえるような変動過程のことであろう。戦後日本社会における社会変動過程を直接分析の対象にしようとしている本論では、かかる変動過程に関しては、日本的経営主義からアメリカ流の新自由主義的経営主義への転換という流れとして押さえることになる。市場経済社会の社会変動のもう一つの局面は、諸個人の社会的行動・行為の社会現象把握に直接関わる局面である。そして、それは、諸社会システム・領域内部における諸規範パターンの変動であり、その変動が諸社会システム・領域内部における人間関係様式に与える諸影響という局面である。さらに、この局面における社会変動は、社会が諸個人に対して期待という形で課す責任の形と重さに影響を及ぼすであろうし、それゆえ、諸個人の社会的諸行動・行為の背後にある諸個人の精神生活過程に大きな影響を与えるものであろう。その結果として、諸個人の社会的行動・行為にどのような変容が起こり、今度は反対にそれらの諸個人の社会的行動・行為のあり方は諸社会システム・領域内部における人間関係や諸規範パターンにどのような反作用を及ぼすものなのかも、大事な検討の対象となりえることとなる。

以上のパーソンズ氏の議論から学びながら検討してきた、市場経済社会の社会変動を前提とした社会と個人との関係分析の枠組みを図示するならば、図—1のようになろう。



図一 社会学の視点による社会と個人との相互作用・つくりつくれる関係

この節の最後に、図一にある諸社会システム・領域に関してより具体的に分析対象を限定することが必要であろう。というのも、諸社会システムと言うとき、パーソンズ氏は、アメリカ社会を全体社会として前提とした上で、その内部の経済、政治、そして文化のそれぞれのシステムというものを念頭において議論していたからである。しかし、現代社会の市場経済社会は、いまや地球全体を単一の市場経済社会の中に包摂している。それゆえ、それぞれの国も、その市場経済社会の内部構造の社会システムの一つにすぎない。そうした現代社会のあり方を考慮するとき、ここまで無限定的に使用してきた諸社会システム・領域という用語の意味するところは、第一には、国やさまざまなレベルにおける地域社会システム（国もある意味で一つの地域社会システムである）のことであり、第二には、経済、政治、そして文化というそれぞれの社会諸領域に即したシステムのことである。さらに、諸個人の日常生活に即してみるならば、諸社会システム・領域とは、労働、消費、教育、家族という、やはり現代社会の中でその生活が営まれる空間と時間が分化・自立化しつつある人々の生活諸領域に関わる社会・社会組織・社会制度の諸システムのことを意味するものであろう。

本論は、現代社会における諸個人の行動・行為レベルにおける社会的現象を直接の分析対象とし、そのための分析枠組みを検討している。かかる視点から言うならば、本論では、諸社会システム・領域と言うとき、とくに日本社会の人々の日常生活諸領域に関わる社会システムを念頭においたものとなる。すなわち、本論では、日本という地域社会システムを土台として営まれている、労働生活、消費生活、教育生活、そして家族生活というそれぞれの諸個人の生活に即した諸領域に関わる社会システムおよびそれらの諸社会システム間の関係構造（絡み合いの構造）にかかわる議論を展開していくことになるであろう。

第二章 理性と感情に関する理論

では、社会と個人との相互作用関係の諸規則を探究する社会学は、ある社会に特有の諸個人の行動・行為様式の背後にある諸個人の内的要因、すなわち諸個人の精神生活のあり方に関してどのように把握することになるのだろうか。それを論じることが本章での課題である。ま

ず、人間諸個人の内的生活過程・精神生活過程・心的生活過程の本性をどのように捉えたらよいかについて考察しておこう。

ここでもかかる議論の理論的基礎を、前掲の進化心理学のスティブン・ピンカー氏の「人間の心」についての理論に求めたい。スティブン氏のその理論によれば、「人間の心」とは、人間の長い進化の過程で形成されてきた外的世界の認知装置であり、人間行動・行為の動機付け装置および制御装置なのである。人間諸個人は、この心の装置の機能によって、自己をとりまく外的環境が、自己に危害を与えるものか、それとも自己の生命活動（生活）を支え、促進してくれるものであるかどうかを認知するとともに、その認知にもとづいて自己の生命活動（生活）の中で直面する諸課題を達成するための行動・行為を生産しているのである。「人間の心」は、それゆえ、人間諸個人の目的に応じて、その目的を実現するための行動・行為の戦略・戦術を生み出すための演算装置と行動・行為を引き起こす動機付け装置を備えている。さらに、「人間の心」は、人間諸個人が、自己が建てた目的とそれを実現するための戦略・戦術に沿って自分は行動・行為しているかを自己で見守り、監視する自己の行動・行為の制御装置も備えている。また、そうした「人間の心」の働き、別言すれば人間の心的過程は、脳の生理的過程をはじめとするさまざまな人間の生理的過程によって支えられ、それらの生理的過程と相互作用している。

スティブン氏の進化心理学理論に依拠して「人間の心」について以上のように把握するとして、その「人間の心」およびその働きの本性を明らかにするために、まずは「人間の心」の重要な働きである外的世界の認知の性格について考察しておくことが必要となろう。結論から言うならば、「人間の心」の認知作用は、外的世界が人間個々人にとってどのような意味—それは、根元的には、人間個々人が直面する外的世界は、自己にとって危険か安全か、敵か味方か、また自己の生命（生活）活動に危害を与えるものか、それとも支持してくれるものであるか—ということに関わる外的世界の人間個々人との関係における性質から派生してくるものであろう—をもつのかを認知する価値評価的認知と、人間個々人が自己のたてた目的や目標を首尾よく実現するための戦略や戦術および手段を自覚化し、選び出すことを可能にする、外的世界の事実認定や因果連関の規則性を認知する事実に分けて考えることができる。さらに言えば、かかる二つの認知にかかわる、「人間の心」が備えているメディアとは、価値評価的認知に関しては感情であり、事実に分けて認知に関しては知性である。では、これら二つの認知作用およびそれらの相互関連は、これまでどのように把握されてきたのであろうか。

哲学者中村行秀氏は、哲学界における人間の意識に関する議論を踏まえ、これら「人間の心」の二つの認知作用を、人間諸個人の「生活意識」の二つのモメントとして把握している。中村氏は、ここで言う事実に分けて認知を「認識」と呼び、価値評価的認知を「感情」と名づけている。その上で、同じく中村氏は、人間諸個人の日常生活における「生活意識は、（「人間の心」のそれら）二つの違う働き・内容の意識が一体になった意識だ⁽³⁰⁾」〔（ ）内は引用者による〕

とする。さらに氏は、「いやな・仕事」、「おいしい・カレー」、「いい・声」、「気持ち悪い・顔」などの、私たちの日常意識の諸例を取り上げ、先述した二つの認知作用の、氏の言葉によれば「認識」と「感情」の違いと関連を次のように説明していた。

中村氏いわく、それらの例において、「仕事・カレー・声・顔という意識は、意識する人（意識の『主体』という）の思いや願いに関係なく、意識の対象（意識の『客体』という）が『なんであるか』の意識、つまり、対象の性格をありのままにとらえようとする意識である⁽³¹⁾」。氏によれば、「このように、対象の性質や関係をありのままにとらえようとする意識を『認識』という⁽³²⁾」のであった。同じく氏によれば、「それにたいし、この例で、いやな・おいしい・いい・気持ちの悪いという意識は、意識する人が意識の対象を『どうするか』、つまり、対象にどう関わっていくかという意識である⁽³³⁾」。「このように、私たちが対象にどう関わっていくかという、主体の態度の認知あるいは価値づけにかかわる意識を『感情』という⁽³⁴⁾」のであった。

同じく中村氏によれば、人間諸個人の認知作用における「認識」と「感情」という、かかる二つのモメントは、別ものであるとか、両者を切り離すことができるということの意味するものではないとしても、より分析的に見れば、「認識と感情は対立しあい・否定しあう関係にある働き⁽³⁵⁾」なのである。それはなぜなのであろうか。中村氏によれば、それは、「認識は対象にたいする主体の態度にできるだけ無関係に、対象を客体としてあるがままにとらえようとする働きであるのにたいして、感情は対象にたいする主体の態度そのものに関わる働きであるから⁽³⁶⁾」なのであった。氏によれば、「このように、互いに対立しあい・否定しあう働き・力・要素・性質が、対立しあいながら一体となっている（『統一』されている）関係を『弁証法的矛盾』という。認識と感情は弁証法的矛盾の関係にあり生活意識として統一されている⁽³⁷⁾」と言えるのである。以上の中村氏の指摘にもあるように、「認識」と「感情」という人間の認知作用の二つのモメントの働きにおける矛盾し、時には対立することもある関係であるという関係上の性質をもっていることによって、これまで「認識（知性）」と「感情」は、対立的に、または別ものであるかのように考えられてきた歴史を有している。さらに言えば、人間の認知作用にとって、「認識」は肯定的に考えられてきたが、「感情」に関しては、単に否定的というだけでなく、正しい認知にとっての疎外要因ないし邪魔ものというように考えられもしてきた。

「認識」と「感情」に関するそうした把握は、人間「理性」との関わりで「認識」と「感情」とを考察しようとするときに顕著となるようである。中村氏も次のような指摘を行っている。すなわち、中村氏いわく、「激しい感情に支配されるとき思考力は停止するし、反対に、複雑な思考に没頭しているときには感情は表にでない。こうしたことがらは、私たちが日常生活でよく経験することなので、概念による認識能力としての『知性』あるいは『理性』と感情は、互いに相いれない精神活動だとして、対立させて考えられることが多い。国語辞典でも、『理性』は『感情にうごかされたりしないで、論理的に考えをまとめたり物事を判断したりする頭の動

き』と説明され、『理性的』は『感情的』の反意語とされている⁽³⁸⁾」くらいであると。中村氏自身も、「認識」と「感情」との関係に関するそうした常識的把握は、「感情」のモメントと結びつかない「認識」や、「認識」のモメントと結びつかない「感情」はないので、厳密に言えば間違いであるとしても、「『理性』は『情動』レベルの意識ではなくて、『概念』レベルの意識であることをのべていて、それなりに正しい説明だということができる⁽³⁹⁾」ことを認めているのであった。

しかし、他方で、中村氏は、そうした「『常識』をそのままにしておくことは、人間は『感情的動物』であって、『感情的』であることは『非合理』であることだから、人間のすることに正しいとか誤りだとかいうのがそもそも無意味なことなのだ、というようなニヒリズムを容認することになりかねない⁽⁴⁰⁾」ことを心配するのであった。さらに、中村氏によれば、「認識（知性）」、「感情」、そして「理性」のそれぞれの関係をどのように考えるかということは、単に理論上の問題だけでなく、人間社会の歴史は、支配者が自らの支配を正当化する論理をそれらの関係のあり方をめぐる議論から作り上げてきた歴史に彩られてきたということからもわかるように、極めて社会的実践上の問題でもあったのである。氏いわく、「支配者は自らの支配を正当化する論理として、感情にたいする知性（それはしばしば、法・道徳・制度と同一視される）の優位という『常識』を普及⁽⁴¹⁾」してきた。例えば、「哲学史のうえでは、すでにプラトンにおいて、知性＝支配者、感情＝被支配者とみなす考えがみられる。プラトンによると、個人の魂が『理知』『気概』『欲望』という三つの部分からなりたつように、国家もその理知的部分である『哲学者』、気概的部分である『軍人』、欲望的部分である『民衆』からなりたっている（奴隷と女はどれにも属さない『魂のない』ものとされる）。そして、正義とは、これら三つの部分が支配と被支配の関係で各々自分の分をまもって秩序を保つことなのである。つまり、理知（哲学者＝支配者）は全体の真の幸福を立法し、気概（軍人＝支配者の補助者）はその支配に服しながらその働きを助け、欲望（民衆＝被支配者）は自分の分をまもって理知と気概の支配に従うことが国家の『公正』だと⁽⁴²⁾」言っていたのである。中村氏によれば、「このような（誤った）主張は、知性と感情の優劣についてのみならず、知性とは何か、感情とは何かについての勝手な解釈に基づいている。『女性は感情的だ』という言い方をふくめて、こうした『常識』を疑うことが大切⁽⁴³⁾」〔（ ）内は引用者による〕になるのである。では、知性、感情、そして理性とそれらの相互関連をどのように理解したらよいのであろうか。

この問題を哲学的に考察し、中村氏が批判的に指摘していた「常識」に対し、感情のもつ理性性とそれが人間理性にとって決定的に重要であることを説いたのが、スコットランド出身の哲学者、ジョン・マクマレー氏なのであった。まず、感情生活それ自体の中には、本当に理性は存在しないのであろうかという問をマクマレー氏は発する。その上で、氏は、この問題を次のような議論から解こうとする。マクマレー氏いわく、「もし、感情的理性の本性を発見しようとするならば、はじめに、理性一般とは何を意味するのかについてはっきりしておかなけれ

ばならない⁽⁴⁴⁾」のであると。

では、マクマレー氏は、理性的であるということをどのように定義していたのであろうか。マクマレー「氏いわく、『理性とは、自分自身でないものの本性の見地から、意識的に行動する力能のことである。我々は、これを、短く、理性とは、対象の本性の見地から行動する、すなわち、客観的に行動すると表現することができる。理性とは、このように、我々の客観性のための力能なのである』。換言すれば、『我々は、人の行動に特有な本性を説明するのに、人間の内的な構造 (the inner constitution) にある何かを探しだそうとする。我々は、今なお、人は、必然的に、他の何かと同じように、自分自身の本性の点から行動しなければならないと仮定している。正確に言えば、これは間違いである。理性とは、自分自身の本性の見地からではなく、自分の外の世界の本性に関する知の見地から、行動する力能なのである』。それゆえ、『科学や科学の実践的応用が理性に依拠していることを理解することは容易なことなのである⁽⁴⁵⁾』と。

理性を以上のように定義するマクマレー氏は、では、私たち人間の感情の理性性をどのように捉えていたのであろうか。理性の定義の中で科学や科学の実践的な応用は理性的行動であるとしていたマクマレー氏ではあるが、しかし、同じくマクマレー氏によれば、そうした科学や科学の実践的応用は、人間諸個人の生活活動全体から見れば決してそれら自体が自己目的的な活動なのではなく、むしろ人間諸個人の自己目的的活動の一つの契機を成す活動でしかないものなのであった。それゆえ、マクマレー氏によれば、科学や科学の実践的応用の活動それ自体は理性的であっても、それらの諸活動を組み込んでいる全体としての人間諸個人の自己目的的活動が非理性的性格を有する場合は、非理性的性格に転化する可能性を孕んでいるものなのであった。

かかる人間の生活活動に固有な問題は、ヘーゲル氏流に言えば、「理性の狡知」という問題である。ヘーゲル氏は言う、「確かに、(例えば人間と自然との関係において、)『自然の法則がどういうものであるかを知るためには、われわれは自然を知らなければならない。なぜなら、……これらの法則の尺度はわれわれの外にあるのであって、われわれの認識の働きはそれらの法則になにもものをもつけ加えず、それらの法則を促進もしない。ただ、それらの法則にかんするわれわれの認識がひろがりうるだけである』。それゆえ、自然との交渉において人間は、自己の生活の目的を実現するためには、人間の『内的自然性』(欲求、衝動などが自然的なものとして持っている偶然性)を、『ことがらの本性』としての自然必然性によって陶冶し、『ことがらの本性』に従って自己の行動を規制することを学ばなければならないのである。しかし、これは、ことがらの一面である。自然との交渉において、人間は、一見すると、自然の『ことがらの本性』に、唯々諾々と従っているように見えながら、しかしなお、その中で、自己の目的を実現していく存在、それが人間、または、人間の理性というものなのである。それゆえ、同じくヘーゲルによれば、人間に固有の自然との物質代謝活動である労働と『産業の原理は、われわれが自然からジカに受け取るものとは反対のものを含んでいる。というのは、ここでは

自然物は使用と装飾とのために加工を受けいなければならないからである。産業においては人間それ自身が目的であって、人間は自然を自己の従者として取扱い、自然に人間の活動性の刻印を押す』ものなのである⁽⁴⁶⁾」〔(例えば……) は、引用者による〕。

かかるヘーゲル氏の言う「理性の狡知」の問題を、マクマレー氏は、理性一般の問題ではなく、人間の行為動機の問題、科学的認識を行う背後にある科学的認識による知識を活用して実現しようとする人間の生活活動総体における行為動機の問題として考えていた。しかも、同じくマクマレー氏によれば、人間の生活活動における行為動機の問題は、私たちの感情生活に直接かかわる問題なのであった。氏いわく、人間の『生活(生命活動)すべては、活動である』。すなわち、『単なる思考は現存するものではない。思考も、また一つの活動であるのだ……。あらゆる活動は十分な動機をもたなければならず、そして、動機はすべて感情的なものなのである。動機はみな我々の気持ち(feelings)に属しており、我々の思考力(thoughts)に属しているのではない。……思考力のなかに現れる理性性は、それ自身、行為の諸動機に属しているある理性性の反映なのである。諸活動を生み出して、支えている諸感情が理性的諸感情でないならば、諸活動はどんな活動であっても、たとえ、思考という諸活動であっても、我々の理性を表現することはできないということを、それは、意味しているのである⁽⁴⁷⁾』と。

このようにマクマレー氏は、感情理性の方が知性理性と比較して人間理性にとってより根元的であると理解していた。では、マクマレー氏の言う感情理性とはどのようなものであるのだろうか。マクマレー氏は、この問題を私たちの生活様式との関連で解こうとしていた。氏によれば、私たちの生活様式は、この問題との関係で言えば、非理性的感情によって遂行されるプライベートライフと、理性的感情によって遂行されるパーソナルライフという二つの生活様式に区分できる。マクマレー氏によれば、「我々は、日常生活における自己の感情の遇し方に二つの異なった道をもっているという。ひとつは、自己の感情を十分に完成させていく道であり、もうひとつが、うすっぺらに狭く制限していく道である。そして、自己の感情のこれらの遇し方の違いは、まず、何よりも、我々の感情生活を自覚していくときの入口である諸感覚の遇し方の違いに表現されるという。すなわち、マクマレー氏によれば、『もし、我々の諸関心(諸利害)が狭い実践的なものであるならば、我々が、外の世界の中に知覚するものは、狭い、一連の利用可能な諸事実となるであろう。……この場合には、我々のもろもろの感覚は、特定の、前もって定めおかれた諸目的のために特化された道具でしかないのである』。このように、自己の特定の利害を実現することを目的として、自己の外の世界に手段的、道具的にかかわる我々の生活(生命)活動をマクマレー氏は、プライベートライフと呼び、この生活様式において、我々は、ただ単に、外の世界を手段視、道具視するだけでなく、自分自身の感情生活それ自体を手段的、道具的に処遇しているのである。そして、かかるプライベートライフは、自己中心的な生活という性格をもつ。すなわち、『我々が、外の世界を自己の私的な欲求満足のために存在していると見做すとき、我々は、自己中心的なのである⁽⁴⁸⁾』。

かかるプライベートライフの対極にある生活様式を、マクマレー氏は、パーソナルライフと呼ぶ。そして、その生活様式は感情理性に依拠した生活様式に他ならないものなのであった。マクマレー氏いわく、『感情生活における理性が、我々が生活している世界の真の諸価値の見地から我々の行動を規定する。感情生活の理性が、善と悪、正と不正、美と醜、そして、それらは、ただ単なる大まかで、一般的で、知的な抽象でしかないが、(世界の)無限に多様な諸価値のすべてを発見し、示してみせてくれるのである。感情生活の具体的な生の営みにおける人間本性の発展とは、事実としては、感情理性の発達なのである』。それゆえ、かかる性質をもつ感情理性にもとづいた生活活動において、外の世界の固有な価値を認め、自己の私的な目的を実現するために手段的、道具的に関係するのではなくて、対象世界それ自体の諸価値を肯定するような態度で、対象世界と関係する生活活動こそ、マクマレー氏の言う、パーソナルライフなのである⁽⁴⁹⁾』。

そして、そうした「意味でのパーソナルライフにおいて、自己と対象世界の結びつきを媒介するものこそ、同じくマクマレー氏によれば、愛 (love) という名のメディアである。『感情的理性とは、客観的な感情が、刺激にたいする単なる反応ではないということである。感情的理性は、現実のことがらの価値や意義を直接的に評価することのできる力能である。感情的理性は客観的価値を理解する我々の力能である』。そして、愛は、この感情理性を現実のものにするメディアである。すなわち、『愛は、人間存在に特徴的な、根本的で、積極的な感情である』。もちろん、マクマレー氏は、愛は、常に、理性的であるとは限らないことを知っている。にもかかわらず、マクマレー氏によれば、愛は、感情理性にとって本質的なものなのである。愛は、確かに、『主観的で、不合理的でもあり、または、客観的で、理性的でもありえる。他の人に愛を感じているとき、その人が与えてくれる楽しい感情を経験することもできるし、また、自分が相手を愛することもできる。それゆえ、我々は、自分自身に、自分が愛しているのは、本当に相手の人であるのか、または、自分自身ではないのかを、問うてみなければならない。相手と一緒にいるとき、相手を楽しんでいるのか、それとも、自分自身を楽しんでいるのかを問うてみなければならない。そして、相手を、自分と一緒にいてくれて自分を楽しませ続けてくれる道具と考えているのか、相手の存在と現実性それら自身かけがいのないものであると感じているかどうかを問うてみなければならない。これら二種類の愛の間の差異は、究極的には、オルガニックライフとパーソナルライフの間の差異である。その差異は、理性的な感情と不合理的な感情の差異である。客観的に愛するという力能は、我々を人 (persons) にする力能である。その力能は、対象の見地から行動する、我々の力能の根源的な源泉である。それは、理性性の中核なのである⁽⁵⁰⁾』。

このようにマクマレー氏によれば、感情の理性性とは、自己がかかわっている対象世界の固有の諸価値を認識できる知 (感情知) であるというところにあるのであるが、さらに言えばその感情知は、「対象世界に関する知であると同時に、そうした対象世界の固有な諸価値を認識

できる自己に関する知でもあるというところにその特徴があるという⁽⁵¹⁾」のであった。マクマレー氏は言う、「特に、パーソナルライフにおいて十全に発達する感情知は、『私が知るとともに私が知られる』のでなければならないのである。それゆえ、マクマレー氏によれば、我々の感情生活が、文明化されず、野蛮なままにおかれている知性理性と科学の時代とは、また、我々は自己を喪失している時代を意味するであろう⁽⁵²⁾」こととなる。

以上、マクマレー氏の感情理性に関する議論を検討してきた。ただ、それで感情の理性性に関する議論がすべて尽くされているというわけではない。とくに、私たちの感情生活が文明化され、理性性を獲得するための土台をどのように考えたらよいかという課題がまだ残されている。私見によれば、その土台は、私たちの生活における社会的諸関係およびそれらの諸関係の下での私たちの感情生活におけるコミュニケーションの存在様式あるであろう。それゆえ、感情理性の理論をさらに探究するとともに私たちの感情生活における理性性の発達に関する理論を探究する課題とは、人間関係、とくに私たちの感情生活におけるコミュニケーション（感情コミュニケーション）の理性的存在様式を探究する課題でもあるのである。そこで、次に、章をかえて感情コミュニケーションに関する理論を見ることにしよう。

註

- (1) 内田司『理性、感情、諸個人の自律—ホープ氏の道徳知の理論—』創風社、1996年の中で、このマクマレー氏の理性と感情の理論を紹介している。
- (2) John Macmurray, Reason and Emotion, faber and faber, 1995, p.6.
- (3) 社会学においては、行動 (behavior) と行為 (action) を概念的に区別して扱っている。見田宗介・栗林彬・田中義久編『社会学事典』弘文堂、1988年によってその違いを確認しておくならば、行動とは、「身ぶりや発話など言語的・非言語的次元で人間や動物が示すふるまいのこと。そのふるまいを意識的にしているか否かは問わない。通常は外部から観察可能なふるまいを示すが、思考や感情なども行動に含める論者もいる」と定義されていた。これに対し、先にその定義を確認した「行動 (behavior) が『動機づけられた生活体が、先行条件に規定されておこす反応の全体的過程』(富永健一) であるとすれば、行為は、その高次の形態としてシンボルによって媒介された地平での行動を意味する」ものとされている。本稿では、意識的、無意識的を問わず、諸個人のすべての行動を考察の対象としているが、行動と行為に関するそうした概念上の違いを考慮して、考察対象の行動を行動・行為と表記することにする。
- (4) 河合隼雄『人の心はどこまでわかる』講談社+α新書、2000年、155頁。
- (5) 同上、157頁。
- (6) 同上。
- (7) 同上、155頁。
- (8) 同上。
- (9) 同上、156頁。
- (10) 同上、157頁。
- (11) 林道義『父性の復権』中公新書、1996年、5頁。
- (12) 同上、1頁。
- (13) 同上、2頁。
- (14) 同上、5頁。
- (15) スティーブ・ピンカー『人間の本性を考える(下)』山下篤子訳、NHKブックス、2004年、175頁。
- (16) 同上、192～193頁。

- (17) 同上, 210頁。
- (18) T.パーソンズ『社会構造とパーソナリティ』武田良三監訳, 新泉社, 1990年(新製版2刷), 211頁。
- (19) パーソンズ氏のいう現代社会のアノミー性という性格は, マルクス主義においては, 人類の歴史法則を自然史的過程として把握する議論や, 資本主義的生産様式の下における社会的生産の無政府性という性格に関する議論として展開されてきた。例えば, エングルス氏は, ヨーゼフ・ブロッホ氏宛の手紙の中で人類の歴史法則に関し次のように論述していた。「歴史のつくられ方というのは, 多くの個別意志の葛藤のなかから最終結果がいつでも生まれてくるものであり, しかもそれらの個別意志はそれぞれまた多くの特殊な生活条件によってそのような個別意志になっているのです。つまり無数の, たがいに阻害し合う力, すなわち力の平行四辺形の無限の集まりがあり, そのなかからひとつの合成力—歴史の結果—が生まれるのであり, それ自身また全体として無意識に, また無意志にはたらく力の産物としてみなすことができるのです。なぜならば, 個々の一人ひとりの者がもとめるものは, 他のそれぞれの者によってはばまれ, そして出て来るものはだれもがもとめなかったものということになるのです。こうしてこれまでの歴史はひとつの自然過程のように経過していますし, また本質的には同じ運動法則にしたがっています。しかし, 個々の意志が—それぞれが体質や外的な, 最終的には経済的な事情(それ自身の個人的な事情または一般的—社会的な事情)にせまられて, そのもとめるところがきまってきます—そのもとめることを得られず, 溶け合って全体の平均, すなわち共通の合成力が生まれるからといって, 個々の意志イコール・ゼロとみなすべしなどと考えるはなりません。それどころか, 個々の意志はそれぞれ合成力に寄与するのであり, そのかぎりですのなかに含まれているのです」(『マルクスエンゲルス全集37』大月書店, 1975年, 402~403頁)と。ただし, この一文は, 現状分析するさい, 過度に経済的要因を強調することを戒めている文脈で展開されている文であるということは注意されなければならぬであろう。

また, 資本主義的生産様式の下での社会的生産の無政府性的性格について, 同じくエンゲルス氏は, 次のような議論を展開していた。「すでにみたように, 資本主義的生産様式は商品生産者たちの社会に割りこんできたのであるが, この商品生産者は個人的生産者であって彼らの社会的な連関は彼らの生産物の交換によって媒介されていた。しかし, 商品生産にもとづく社会は, すべて, そのなかでは生産者たちが彼ら自身の社会的連関にたいする支配力を失っているという特徴をもっている。各人は, めいめい, たまたま自分のものになっている生産力手段を用いて, 自分の特殊な交換欲求のために, 生産する。だれにも, 自分の品物と同じものがどれだけ出てくるのか, そのうちのいったいどれだけ使用されるのかは, わからない。だれにも, 自分の個人的生産物が実際の需要を見いだせるかどうか, かかった費用を回収できるかどうか, または, とにかくそれが売れるかどうか, はわからない。そこで支配しているのは, 社会的生産の無政府状態である。だが, 商品生産も, 他のすべての生産形態と同様に, それに特有な, それに内在する, それと切り離せない諸法則をもっている。そして, これらの法則は, このような無政府状態にもかかわらず, 無政府状態のなかで, 無政府状態をとおして, 自分を貫くのである。これらの法則は, 社会的な連関の唯一の存続する形態である交換のうちに現れて, 個々の生産者にたいして競争の強制法則として効力を現す。だから, これらの法則は, 最初は生産者たち自身にも気づかれないものであって, 長い経験をとおしてはじめてしだいに彼らによって発見されなければならない。つまり, これらの法則は, 生産者たちから独立して, 生産者たちにさからって, 彼らの生産形態の盲目的に作用する自然法則として自分を貫くのである。生産物が生産者たちを支配するのである」(フリードリヒ・エンゲルス『空想から科学へ』寺沢恒信訳, 国民文庫, 1972年, 94~95頁)と。

以上が現代社会の有しているアノミー性という性格に関するマルクス主義における議論の一部である。いずれにしても, この現代社会の性格が私たちの生活, 人間関係, そして精神生活にどのような影響や困難をもたらすものか, 感情コミュニケーションの社会学にとっても重要な課題であろう。

- (20) T. パーソンズ, 前掲書, 216頁。
- (21) 同上, 225頁。
- (22) 同上。
- (23) 同上。
- (24) 同上。
- (25) 同上, 218~219頁。

- (26) 同上, 219頁。
- (27) 同上。
- (28) 同上, 219~220頁。
- (29) 同上, 225頁。
- (30) 中村行秀『哲学入門—生活のなかのフィロソフィー』青木書店, 1989年, 113頁。
- (31) 同上。
- (32) 同上。
- (33) 同上。
- (34) 同上, 114頁。
- (35) 同上, 115頁。
- (36) 同上。
- (37) 同上。
- (38) 同上, 140頁。
- (39) 同上。
- (40) 同上, 141頁。
- (41) 同上, 144頁。
- (42) 同上。
- (43) 同上, 145頁。
- (44) John Macmurray, *ibid.*, p. 4.
- (45) 内田司『理性, 感情, 諸個人の自律—ホープ氏の道徳知の理論—』創風社, 1996年, 24頁。
- (46) 同上, 25頁。
- (47) 同上, 27~28頁。
- (48) 同上, 29~30頁。
- (49) 同上, 32頁。
- (50) 同上, 32~33頁。
- (51) 同上, 37頁。
- (52) 同上。

The Sociology of Emotional Communication and the Modern Societies (1)

UCHIDA Tsukasa

One of features of our life style in the modern societies is that we live in the way of life in which reason is dissociated from the emotional life and is contrasted with it. And we have also given a big importance on reason, but on the other hand we have neglected an important significance of the emotional life.

In modern market societies in which we have lived, we have had to adapt ourselves to the rationalized social life in which the principles of modern rational and economized social life, like maximal profit by minimal cost, optimization, efficiency, and possibility of calculation, have been supreme ones. In such economized way of social life in the market societies, we have to treat the world outside us and ourselves as a means and instrumentally with profit-and-loss emotion (arithmetic) to attain ourselves ends, whether we wanted to or not.

In such social life, we have seen only intelligence as reason, but in the other hand, we have made emotions belong to the second and subordinate place, by seeing them as disturbing our rational activities and being irrational things. However, such very social life style seems to have suppressed our emotional life and have raised a lot of emotional problems that we don't know how to solve, not only in our individual minds but also in our social world.

I am going to analysis social conditions and our social life style which have raised such emotional problems, from the point of view of emotional communication in a series of articles. In this first article, I intend to examine what significance and place our emotions and emotional life have in sociology.

Key Words : emotional communication, sympathy, profit-and-loss emotion (arithmetic) , suspicious communication, arrogance and resentment, love

(うちだ つかさ 本学人文学部教授 生活構造論専攻)